

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）概要（未定稿*）
食品の安全性確保のためのリスク評価への消費者関与
- ヨーロッパにおける取組から学ぶ -

1. 日 時：平成 18 年 8 月 30 日（水）14：00～17：07
2. 場 所：星陵会館（東京都千代田区永田町 2 - 16 - 2）
3. 主 催：食品安全委員会
4. 参加者：122 名（消費者、食品関連事業者、自治体関係者、報道等）
5. 議 事
 - （1）開会
 - （2）開会挨拶 見上 彪 食品安全委員会委員長代理
 - （3）講演

「リスクコミュニケーションとステークホルダー（関係者）との関係
：E F S A の役割と経験」

アン・ローラ・ガッサン氏（欧州食品安全機関コミュニケーション部長）

90 年代、EU では、B S E やダイオキシン等の食品安全問題に際し、一般の人への情報管理において、不確実性の伝え方等、透明性に問題があることを学んだ。そこで、EU は、食品安全に関し見直しを行い、E F S A を設立した。E F S A は、欧州委員会や各国から独立し、リスク管理から切り離されたリスク評価とリスクコミュニケーションを行う機関である。

E F S A は、関係者と適時適切に密接に連携し、正しい情報を提供するが、食品安全規制に責任を負う機関ではない。

E F S A のアプローチには、科学的卓越性、独立性、透明性と公開性、各国との緊密な協調、消費者の信頼の構築、ステークホルダーとの強固な関係という特徴がある。

E F S A は、設立後 2 年目に実績評価を行い、理事会から、加盟国との積極的なネットワークの構築など、6 つの優先分野の勧告を受けた。

科学委員会は 9 つの専門分野のパネルを持ち、適時に開催し、公開している。また、科学者のバックグラウンドも開示するなど、透明性の確保に努めている。

リスクコミュニケーションは、E F S A の重要な使命の 1 つである。効果的なリスクコミュニケーションを行うには、リスクの説明、対象者の関心が高い事項の検討、受け手に行動をとる必要があるかどうかの助言などを行う必要がある。

国によって関心の高い事項は異なるが、リスク評価と科学的専門性をベースに、すべての関係者を初め多くの人々に、適時、的確で一貫した、正確なコミュニケーションを行う必要がある。

一般の人々は、消費者団体や医師、マスコミなど、いろいろなものを情報源としており、E F S A は、そのようないろいろな情報源に対して、適切なコミュニケーションを行っている。

*本資料は、各発言者など出席者による確認を経ていない未定稿であり、今後修正の可能性がある。

ステークホルダーとの関係では、定期的協議を行うプラットフォームを設置し、また、その他のより多くの人々の意見を聞く機会を持っている。これら双方向の意見交換は不可欠である。

また、ステークホルダーとの関係は、コミュニケーション部だけでなく、ほかの2つの機関でも行っている。

アスパルテムについて、E F S Aは、2005年7月に再評価の諮問を受けた。その時点で、新たな知見を保有していたラムジーニ財団のデータも公開し、プレスリリースを行った。

2006年5月、E F S Aは、アスパルテムの安全性評価について、これ以上の安全性に関する検証は不要であり、これまでのA D I修正も不要という発表を行った。ラムジーニ財団代表とともに記者会見を行い、これは多くの報道やウェブで配信された。

これは、バランスのとれた統括的な透明性のあるリスクコミュニケーションが行われた例である。

将来展望として、一般の人々に対する新しいコミュニケーションツールの確立、メディアに対する情報セミナー、ウェブサイトの更新、いろいろな分野の科学者との連携を図り、透明性、平易さ、一貫性に基づいたリスクコミュニケーションを行っていきたい。

(4) パネルディスカッション及び会場との意見交換

○ パネルディスカッション

野村： 欧州でも、食品に関する安全が注目されている。ガッサンさんは、E F S Aのリスクコミュニケーションの責任者である。食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションは、評価結果に関するものが中心になっており、より多くの人に参加するのが難しいのが実態だ。消費者のリスクコミュニケーションへの参加などについて話し合っていきたい。

小沢(日本生活協同組合連合会)： 食品を含む商品に関する問い合わせ対応、食品の安全・安心に関する消費者の意識調査などを行っている。昨年、組合のモニター1,000名に対し、「リスク分析」が3つの要素から成ることを知っているかについて調査を行ったが、まだまだ浸透していない。ガッサンさんのいわれたように、日本も、まだまだ学びながら進んでいく状況だ。

ガッサンさんに3つほど伺いたい。 科学パネルの人々の選び方、独立性の確保の仕方。 リスク評価について、ステークホルダーとのリスク評価をどのように考えているのか。評価機関、管理機関それぞれ縦割りで実施している日本のリスクコミュニケーションをどう考えるか。 ステークホルダーとの会議のあり方、議題、会合結果の反映などについて伺いたい。

近藤(サントリー株式会社)： 企業においては、ほとんど消費者関連部門にいた。サントリーでは、お客様相談部門には80名ほどのスタッフがいる。消費者の声は、クレームというより、問い合わせが大部分を占める。その中から、消費者の声を汲み取っている。

ここ数年、大手企業やスーパーは消費者の信頼を失い、消費者からの質問も非常に厳しくなっている。原材料、成分、自分の健康に対する影響について、具体的情報のニーズが高くなった。それを聞かれる前に情報公開していく時代になった。

ガッサンさんへの質問は、以前企業におられたということで、今の立場から、企業の情報公開などについてご示唆をいただきたい。

山本（国立医薬品食品衛生研究所）：食中毒菌の検出法、魚介類の毒素検出法、食品中の微生物のリスク評価の研究を行っている。サルモネラと卵の関係、カンピロバクター、リステリアサイトゲネスなどのリスク評価を行ってきた。国際的に、コーデックスにも参加している。

ガッサンさんには、リスク評価の公表やコミュニケーションは、科学者が直接行う必要があるのか、専門的トレーニングを受けた人が行うべきではないか。殊にこれまでのＢＳＥ関連のリスクコミュニケーションにおいては、来場者はバラエティーに富んでおり、コミュニケーションをとることが非常に難しかった。対象を分けてコミュニケーションを行うべきなのかを伺いたい。

野村：今の各パネリストの質問から、まずは科学パネルの選ばれ方と独立性の保ち方について、ガッサンさんに伺いたい。

ガッサン：ＥＦＳＡの科学パネルの独立性に関しては、手続が全部決まっている。それに従って、ウェブで公開されている。応募者のバックグラウンドを公開し、内部の予備的な選択基準に照らして候補者を選び、我々のメンバーにも見てもらう。貢献できるか、利害関係が生じないか等を、外部の監査機関、アドバイザリーフォーラムでも検討する。就任時には、中立性、独立性を宣誓してもらう。その宣言文もウェブで公開する。

委員会が始まる前には、委員長が、このテーマについて独立性が保てるかということを確認し、問題がある場合は投票権を行使しないなど、さまざまに運用を工夫している。

野村：次に、リスクコミュニケーション担当者について。対象者別にリスクコミュニケーションすべきか。リスク評価とリスク管理のリスクコミュニケーションの関係について。

ガッサン：ＥＦＳＡにおいて大事なことは、科学者みずからがかかわることである。プレスリリース作成にもかかわっている。ジャーナリストからの具体的要請に対し、パネルの議長などがインタビューを受けることもある。言語の問題もあるので、ほかの立場の人がインタビューを受けることもある。

スタッフ間でキーメッセージを統一すること、コミュニケーションの専門的な訓練を受けることも必要だ。

また、対象者を絞ってコミュニケーションを行うことが、効果的である。

コミュニケーションの一貫性は保つべきだが、リスク評価をする人たちは独立性を保持すべきである。ＥＦＳＡは、ヤギのＢＳＥについてＥＵと協力したが、独立性は保ち、この情報はＥＦＳＡから出たということは明らかになるようにしている。このようなことを通じて、一般の人たちが、ＥＦＳＡは独立していると理解できるようにしなければならない。

野村：ステークホルダーとの会議のあり方、テーマのとり方。企業の消費者に対するコミュニケーションへのアドバイスについて。

ガッサン：ステークホルダーとの会議の議題の選び方は、いろいろある。ステークホルダーへのインプットの仕方、ステークホルダー自身の関心という双方向のやりとりが大事だ。彼らの声を聞き、フィードバックを得る。また、我々が行った新しい評価については、ステークホルダーとの会議を通じて、必要な情報を伝達していく。

企業のコミュニケーションは、透明性こそ鍵である。消費者に対してだけでなく、ほかのステークホルダー、官に対しても同様である。もちろん競争情報で公開

できないこともあるだろうが、企業の持つ多くの情報を共有できれば、非常に役立つだろう。

企業は、官の出した情報を、自社に都合のいいように余り解釈し過ぎないことが重要だ。官の出した情報の独立性には注意を払ってほしい。

野村：消費者がどのようにリスクコミュニケーションに参加していくか、そのためにそれぞれの立場でどのようにすべきか、伺いたい。

山本：科学者として、リスクコミュニケーションにおいて、専門用語をわかりやすく紹介するとか、数量をどのように具体的にわかっていただくか、トレーニングが必要だと思う。マスメディアを介しての情報提供の方法は検討すべき問題だ。消費者や業界からの情報提供は、双方向という意味でも大変重要である。

近藤：企業の出す的確な情報は、消費者の役に立つ。商品を正しく取り扱っていただける情報、安全情報、楽しい情報、他社よりもすぐれた情報などを、普段から品質本位で正しく出していくことによって、いざというときに、あの会社の情報なら大丈夫と思っていただける。

業界団体が教育機関と連携して、あるいはインターネットで、正確な情報を提供すべきだ。企業間同士でも、競争だけでなく、協力して出していきたい。

例えばスパークリングワインは、針金できっちり栓をしている。以前はレストランで提供していたが、食生活が変わって家庭でもあけるようになったので、コルクスクリューではあけないでくださいという表示が必要になった。これは、消費者と企業の情報にギャップがあったという例である。

野村：今、国が実施しているリスクコミュニケーションについて、要望を聞きたい。

近藤：企業情報は今まで余り歓迎されないこともあったが、それを上手に活用できるシステムをつくってほしい。

小沢：リスクコミュニケーションというと、意見交換会というイメージが強いが、ガッサンさんのお話を聞いても、総合的な形態が必要だ。5年前には、消費者の意見を述べる場はほとんどなかったのが、大きな前進ではあるが、意見交換会で説明は受けても、それが最終的にどのように反映されているか分かりにくく、いわせるだけなのかという感じがある。その辺をどう解決するかが大きな問題だ。

多くの消費者は、食品の安全に高い関心を持っているので、わかりやすく説明されれば受け入れられると思う。

野村：科学者のリスクコミュニケーションのトレーニングと、パブリックコメントの反映のされ方について、ガッサンさんにお伺いしたい。

ガッサン：リスクコミュニケーションは複雑で、たくさんの作業がある。リスクコミュニケーションの訓練は、科学者だけでなく、リスクコミュニケーションにかかわる者すべてに重要である。EFSAでは、コミュニケーション部だけでなく、パネルの座長なども訓練を受けている。また、想定問答をつくるなど、事前にきちんと準備することも有効である。

一般の人の意見が政策に反映されているのかという点については、我々は政策に関与していないが、加盟国から、加盟国の意見が最終報告に反映されるべきだという意見が出てきた。透明性を保つために、その意見をなぜ反映したか、反映しなかったかということを具体的に示すべきだ。

○会場との意見交換

会場：ＥＵの食品安全のやり方は模範的だと思っていたが、最近はそうでもない。遺伝子組換えについて、ＥＵの人たちは必ずしもＥＦＳＡを信頼していない。ＧＭＯのフリーゾーンがどんどん広がっている。食品安全の仕組みがうまくいっていないのではないかという印象を持っているが、どうか。

ガッサン：遺伝子組換えは非常に重要な問題だが、サイエンスというより、消費者の選択の問題だ。ＥＦＳＡは、環境ＮＧＯと対話を持っている。いつも見解が一致するわけではないが、我々の職務として、リスク評価をきちんと果たしていきたい。

会場：ＥＦＳＡの組織と運営について。大変広範囲の活動をされているが、年間予算 4660 万ユーロは寄附金なのか。

フードチェーンの中で、リスクは多岐にわたり発生してくる。ヨーロッパでは、食品に対する規範をつくるという考えはないか。

ガッサン：まず、予算は、ＥＵ共同体の予算で動いている。予算を申請して、認められれば予算がおりる。

フードチェーンは広範だが、ＥＵでは、ベストプラクティスというものをひな形にして、それを広めていこうということをしている。

会場：今年 11 月に企画されているレジストレーティブ・アジェンダに関するステークホルダーとのディスカッションについて、詳しく聞きたい。

ガッサン：ＥＦＳＡに関しては、11 月にはクレームに対してどう評価するかというテーマで会議を行う。立法化ということでは、ＥＦＳＡの絡んでいるものも幾つかある。栄養面でのプロファイル、より広いコンサルテーション等でステークホルダーと協議する。

会場：科学者がリスクコミュニケーションで答えるには限界がある。サイエンティフィック・パブリッシング・ハウスについて詳しいお話がなかったが、ＥＦＳＡには、専門的な部署があるのかもしれない。ジャーナリストがオリジナルの論文に触れやすいような仕組みがあるのか。

ガッサン：サイエンティフィック・パブリッシング・ハウスは、今準備中のプロジェクトで、ほかの学者にも我々の成果を知らせて、科学者が論文を書く際に寄与できるようにする。専門家だけでなく、ジャーナリストともコミュニケーションを図る。

会場：科学者の独立性を確保する手順は日本でも取り入れるべき。ＥＦＳＡを支えるスタッフの独立性、中立性を確保する手順はあるか。また、調査対象に十分なデータが得られない場合、一定の仮定条件をつけて、評価したことがあるか。これは米国産牛肉に対する日本の評価に関連している。

ガッサン：スタッフは、ほかのＥＵ機関と同じ規約、独立性が要件となる。外部専門家と異なり、ＥＵ機関の規約であり、ウェブで公開されている。

完璧なデータをもとにした評価はなかなかできないが、こういったデータをもとに、どういう評価をしたかを明らかにする必要がある。ヤギのＢＳＥについて、ＥＵが求めた定量的リスク評価はできなかったのも、我々は定性的評価を行い、その過程を明確にした。何ができて、何ができないか、何を根拠に結論を出したかを

っきりコミュニケーションすべきだ。

会場：独立性が重要とお話しされていたが、リスクマネジメントは各政府でされているのか。リスク分析の図でリスクマネジメントとリスクアセスメントの円が若干重なっている部分は、E F S Aもマネジメントをいささか行うということか。

ガッサン：リスクマネージャーは欧州議会、欧州委員会、各国政府である。ハーモナイゼーションが進んでいる。我々は諮問を受けて、リスク評価を行う。リスク評価者とリスク管理者との間の対話は重要である。リスクマネージャーは、E F S Aに、オプションとして科学的助言を求めることができる。

会場：リスク認知はE F S Aの仕事なのか。同じ質問を日本のリスクコミュニケーション官にもしたい。食品安全委員会是要請を受けて評価するだけなのか。

ガッサン：アドバイザリーフォーラム、国のレベルのエージェンシーと、リスクアセスメントは分かれている。

永田：食品安全委員会は、必要に応じて適時適切に監視、勧告する機能もあわせ持っているので、評価だけではない。

会場：薬の場合は、リスク認知をするシステムがある。食中毒に関しては保健所が行う。食品安全は、行政本省の施策になるのか。

永田：食品安全委員会がみずから評価する仕組みもあり、現に行っている。評価要請を待っているだけではない。

会場：山本さんに伺いたい。リスクコミュニケーションはいかに透明性を持ち、真実を分かりやすく伝えるかが重要だが、食品安全委員会の中で、コミュニケーションの結果を評価することを進めて、その結果をメディアや一般の人に流してほしい。消費者からの意見が結果にどう反映されたか、コミュニケーションが成功だったかを明らかにしてほしい。

山本：ただいまのご意見は、リスクコミュニケーション結果をどう分析するか、パブリックコメントの扱いはどうなっているかという2つの意味がある。

第1は、これから順次行われていくと想像するが、現在の進行状況はわからない。

パブリックコメントの扱いについては、B S E に関しては、約半数はリスク管理についてだった。リスク評価そのものについては数件しかなかった。それについては委員で検討したが、答申案を変更する必要はなかった。その他のものは検討結果をウェブ上に公表している。

会場：報道とアウトリーチについて、受けとめる側の調査も行う機関があるか。

ガッサン：メディアモニターサービスを使って、データを集めた。

会場：日本はリスクコミュニケーションについては後進国だ。企業として、透明性はもちろん、喧嘩にならずに明るくコミュニケーションできるポイントを教えてほしい。

ガッサン：オープンな対話、建設的な対話が必要だ。システムを変えるには、定義が必要だ。世界共通の解決策はないが、善意、関係者全部の関与、学ぼうとする意思が必要だ。E Uも、すべての実例に学びながら前進している。今回のような各国との交流も続けていきたい。

野村：いいリスクコミュニケーションをするには、どうしたらいいか、3人のコメントーターにも伺いたい。

小沢：ガッサンさんのお話でよくわかったが、「なぜそれができなかったか」という説明が重要だ。ここはリスク評価の場だから、リスク管理のことをいわれても困るという対応がよくあるが、消費者にとっては、リスク評価とリスク管理はつながっている。もっとステークホルダーを大事にしてほしい。リスク評価、リスク管理にかかわっている方のコミュニケーションが重要になる。

近藤：コミュニケーションによってお互いが成長できることが重要だ。官では、意見を聞きましょうといいながら、なぜそれはできないかと説明や言い訳をしたがる。消費者の悩みを聞いて、こちらが成長するという態度を持ってほしい。

山本：皆さんの意見をどう反映したか、どのように検討したかということをオープンにすることは重要だ。全体的には公表しているが、個々には返していないので、そういうことも必要だろう。

会場：会社のシステム、認証などを行っている。リスク評価機関は、リスク分析をしたところとして、施策の効果を監視する義務があると思う。先ほど、食品安全委員会から「勧告することもできる」との回答があったが、「できる」ではなく義務だと思う。E F S A、食品安全委員会それぞれから、各立場でのご意見と個人としてのご意見を聞きたい。

ガッサン：E F S Aはリスク管理の評価に直接関与していないが、ヨーロッパで大きな政策にかかわる出来事があった場合、例えば、昨年T S Eロードマップを発表した。B S Eが鎮静化し、政策をどのように進化させていくかということで、E F S Aは将来の科学的ポリシーに関する提言をした。

山本：コーデックスの認知、評価、施策遂行、レビューの各段階について、レビューは管理機関が行うことになっている。食品安全委員会は施策が不十分であれば勧告を行うことができる。世界的な流れとは異なるが、日本式お目付け役を求めているのかと思う。

野村：日本のリスクコミュニケーションは3年たち、1つの転換点にあると思う。一般の人が知りたいことについて正確に答えることは、欠かせない重要なことだ。

本日、ガッサンさんから、情報のニーズにどうこたえるか、双方向の情報交換、メディアの活用などの点で、多くの示唆をいただいたと思う。

(5) 閉会

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）

食品の安全性確保のためのリスク評価への消費者関与 - ヨーロッパにおける取組から学ぶ -
に参加いただいた皆様へ

平成18年8月30日
内閣府食品安全委員会事務局

本日は、お忙しい中、意見交換会へご参加いただきありがとうございます。今後のリスクコミュニケーションをより実りある形で実施していくため、本日の意見交換会に関するアンケートを実施しています。以下の設問について、ご回答いただき、意見交換会終了後、受付に設置されている回収ボックスにご提出いただきますようお願い申し上げます。

問1. あなたご自身のことや食品の安全性に関するお考えについてお聞きします。以下の設問について、それぞれあてはまるもの1つを選んで番号を○で囲んでください。

性別

1. 男性

2. 女性

年齢

1. 20歳未満

2. 20歳代

3. 30歳代

4. 40歳代

5. 50歳代

6. 60歳代

7. 70歳以上

職業（複数該当する方は、主なものを1つ選んで○を囲んでください。）

1. 消費者団体（生活協同組合関係者 など）

2. 主婦、学生、無職

3. 生産者（農林水産業従事者 など）

4. 食品関連事業者・団体（加工、流通、販売 など）

5. マスコミ（新聞記者、カメラマン など）

6. 行政（自治体職員、独立行政法人等職員 など）

7. 食品関連研究・教育機関（教員、研究職員 など）

8. その他（具体的に：

）

本日の意見交換会開催をどこでお知りになったか

1. 食品安全委員会のホームページ

2. 食品安全委員会からのご案内資料

3. 食品安全委員会メールマガジン（e-マガジン）

4. 関係団体からのご案内資料

5. 知人からの紹介

6. その他【

】

本日の意見交換会に参加された動機（複数該当する方は、主なものを1つ選んで○を囲んでください。）

1. EUにおけるリスクコミュニケーションの取組に関する情報を収集したかったから

2. リスク評価と消費者の関わりについて知りたかったから

3. 専門家と直接意見交換をしたかったから

4. 業務の一環として参加する必要があったから

5. 国が行うリスクコミュニケーションの取組について知りたかったから

6. その他【

】

「100%安全な食品はないこと」について、あなたはどのように思われますか。

- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 1. 強く思う | 2. やや思う | |
| 3. あまり思わない | 4. 全く思わない | 5. わからない |

問2. 本日の意見交換会についてお聞きします。それぞれあてはまるところを○で囲んでください。

意見交換会開催時期

- | | | |
|-------------|----------|--------------|
| 1. とても適切だった | 2. 適切だった | 3. あまり適切ではない |
| 4. 全く適切ではない | | |

開催方法（参加手続き・場所・所要時間）

- | | | |
|-------------|----------|--------------|
| 1. とても適切だった | 2. 適切だった | 3. あまり適切ではない |
| 4. 全く適切ではない | | |

配布資料

- | | | |
|----------------|-------------|-------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった | 3. わかりにくかった |
| 4. 全くわからなかった | | |

専門家による講演

- | | | |
|----------------|-------------|-------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった | 3. わかりにくかった |
| 4. 全くわからなかった | | |

パネルディスカッション

- | | | |
|----------------|-------------|-------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった | 3. わかりにくかった |
| 4. 全くわからなかった | | |

意見交換時の応答

- | | | |
|----------------|-------------|-------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった | 3. わかりにくかった |
| 4. 全くわからなかった | | |

意見交換会全体

- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1. 評価する | 2. おおむね評価する | 3. あまり評価しない |
| 4. 全く評価しない | | |

問3. 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで、○をつけてください。

- | |
|---|
| 1. 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと（原則公開されていること） |
| 2. 食品安全委員会ホームページ（ http://www.fsc.go.jp ） |
| 3. 食の安全ダイヤル（食品の安全性についての情報提供やお問い合わせ、ご意見を受付ける窓口） |
| 4. 食品安全委員会メールマガジン（e-マガジン） |
| 5. 食品安全モニター制度 |
| 6. 季刊誌『食品安全』 |
| 7. 食品の安全性に関する用語集 |
| 8. 食品の安全性に関する政府広報 |
| 9. その他【 |

】

問4．食品の安全性を確保していく観点から、意見交換会などのリスクコミュニケーションで取り上げるテーマはどのようなものを希望しますか。当てはまるものを3つまで選び、番号に○をつけてください。

- | | | |
|--------------------------|-----------------------|----------------------|
| 1) 食品添加物 | 2) 残留農薬 | 3) 食品中に存在する汚染物質・化学物質 |
| 4) 遺伝子組換え食品 | 5) 動物用抗菌性物質（いわゆる抗生物質） | 6) BSE |
| 7) 食中毒（微生物・ウイルス・かび毒・自然毒） | 8) 鳥インフルエンザ | |
| 9) 新開発食品 | 10) いわゆる健康食品 | 11) リスクコミュニケーション |
| 12) 食育 | 13) その他【 | 】 |

問5．上記で選択したものを含め、会全体を通してご意見や感想がございましたらご記入ください。

お知らせ

食品安全委員会では、食品の安全性についての情報提供やお問い合わせ、ご意見を受付ける窓口として「食の安全ダイヤル」を設けております。皆様からのご質問・ご意見をお寄せください。お待ちしております。

電話：03 - 5251 - 9220・9221

受付時間 10：00～17：00 / 月曜～金曜（ただし祝日・年末年始を除く）

ご協力ありがとうございました。

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）

食品の安全性確保のためのリスク評価への消費者関与 - ヨーロッパにおける取組から学ぶ -

開催日：2006年8月30日（水）
開催場所：星陵会館
参加者：122名 回答者：95名
回答率：77.8%

問1 あなたご自身のことや食品の安全性に関するお考えについてお聞きします。

性別

	回答内容	件数	割合
1	男性	62	65.3%
2	女性	33	34.7%
	無回答	0	0.0%
		95	100.0%

年齢

	回答内容	件数	割合
1	20歳未満	0	0.0%
2	20歳代	9	9.5%
3	30歳代	22	23.2%
4	40歳代	26	27.4%
5	50歳代	22	23.2%
6	60歳代	13	13.7%
7	70歳以上	3	3.2%
	無回答	0	0.0%
		95	100.0%

職業

	回答内容	件数	割合
1	消費者団体	6	6.3%
2	主婦、学生、無職	7	7.4%
3	生産者	2	2.1%
4	食品関連業者	51	53.7%
5	マスコミ	1	1.1%
6	行政	10	10.5%
7	食品関連研究・教育機関	10	10.5%
8	その他	8	8.4%
	無回答	0	0.0%
		95	100.0%

その他FA

・財団法人・コンサルタント・ISO22000審査員・農薬メーカー・ライター・食品安全モニター・農薬製造会社
・食の安全と安心のコンサルタント

本日の意見交換会開催をどこでお知りになったか

回答内容	件数	割合
1 食品安全委員会のホームページ	36	37.9%
2 食品安全委員会からのご案内資料	13	13.7%
3 食品安全委員会メールマガジン	25	26.3%
4 関係団体からのご案内資料	6	6.3%
5 知人からの紹介	4	4.2%
6 その他	8	8.4%
無回答	3	3.2%
	95	100.0%

その他FA

- ・新聞の告知欄・Google News 検索：食品の安全性・厚生労働省メールマガジン
- ・農水省のメールマガジン(2件) ・都のHP・Scienceportal.jp(2件) ・行政

本日の意見交換会に参加された動機

回答内容	件数	割合
1 EUにおけるリスクコミュニケーションの取組に関する情報を収集したかったから	51	53.7%
2 リスク評価と消費者の関わりについて知りたかったから	36	37.9%
3 専門家と直接意見交換をしたかったから	0	0.0%
4 業務の一環として参加する必要があったから	4	4.2%
5 国が行うリスクコミュニケーションの取組について知りたかったから	4	4.2%
6 その他	0	0.0%
無回答	0	0.0%
	95	100.0%

「100%安全な食品はないこと」について、あなたはどのように思われますか。

回答内容	件数	割合
1 強くそう思う	71	74.7%
2 ややそう思う	15	15.8%
3 あまりそう思わない	4	4.2%
4 全くそう思わない	2	2.1%
5 わからない	1	1.1%
無回答	2	2.1%
	95	100.0%

欄外コメント

- ・条件によりますが、一般的には。(回答：1)
- ・この質問はよくない。(無回答)
- ・食べる側の問題が多々あるので。適切な食べ方であればほぼ安全という意味です。(回答：3)

問2 本日の意見交換会についてお聞きします。

意見交換会開催時期

回答内容	件数	割合
1 とても適切だった	12	12.6%
2 適切だった	73	76.8%
3 あまり適切ではない	3	3.2%
4 全く適切ではない	0	0.0%
無回答	7	7.4%
	95	100.0%

開催方法（参加手続き・場所・所要時間）

回答内容	件数	割合
1 とても適切だった	12	12.6%
2 適切だった	78	82.1%
3 あまり適切ではない	1	1.1%
4 全く適切ではない	0	0.0%
無回答	4	4.2%
	95	100.0%

配布資料

回答内容	件数	割合
1 とてもわかりやすかった	12	12.6%
2 わかりやすかった	64	67.4%
3 わかりにくかった	14	14.7%
4 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	5	5.3%
	95	100.0%

欄外コメント

- ・字が小さい（回答：3）
- ・枚数が多すぎて・・・（回答：3）

専門家による講演

回答内容	件数	割合
1 とてもわかりやすかった	10	10.5%
2 わかりやすかった	59	62.1%
3 わかりにくかった	20	21.1%
4 全くわからなかった	1	1.1%
無回答	5	5.3%
	95	100.0%

欄外コメント

- ・早口でついて行けない！（回答：2）

パネルディスカッション

回答内容	件数	割合
1 とてもわかりやすかった	5	5.3%
2 わかりやすかった	72	75.8%
3 わかりにくかった	10	10.5%
4 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	8	8.4%
	95	100.0%

意見交換時の応答

回答内容	件数	割合
1 とてもわかりやすかった	5	5.3%
2 わかりやすかった	65	68.4%
3 わかりにくかった	14	14.7%
4 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	11	11.6%
	95	100.0%

意見交換会全体

回答内容	件数	割合
1 評価する	16	16.8%
2 おおむね評価する	62	65.3%
3 あまり評価しない	7	7.4%
4 全く評価しない	0	0.0%
無回答	10	10.5%
	95	100.0%

問3 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んで、○をつけてください。

回答内容	件数	回答者数に対する割合
1 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと	68	71.6%
2 食品安全委員会ホームページ (http://www.fsc.go.jp)	86	90.5%
3 食の安全ダイヤル（食品の安全性についての情報提供やお問い合わせ、ご意見を受付ける窓口）	47	49.5%
4 食品安全委員会メールマガジン (e-マガジン)	60	63.2%
5 食品安全モニター制度	48	50.5%
6 季刊誌『食品安全』	51	53.7%
7 食品の安全性に関する用語集	58	61.1%
8 食品の安全性に関する政府広報	35	36.8%
9 その他	1	1.1%
無回答	5	5.3%
	459	-

その他FA

・意見交換会

問4 食品の安全性を確保していく観点から、意見交換会などのリスクコミュニケーションで取り上げるテーマはどのようなものを希望しますか。（3つまで）

回答内容	件数	回答者数に対する割合
1 食品添加物	11	11.6%
2 残留農薬	29	30.5%
3 食品中に存在する汚染物質・化学物質	32	33.7%
4 遺伝子組換え食品	23	24.2%
5 動物用抗菌性物質（いわゆる抗生物質）	14	14.7%
6 BSE	10	10.5%
7 食中毒 （微生物・ウイルス・かび毒・自然毒）	16	16.8%
8 鳥インフルエンザ	8	8.4%
9 新開発食品	16	16.8%
10 いわゆる健康食品	39	41.1%
11 リスクコミュニケーション	23	24.2%
12 食育	18	18.9%
13 その他	7	7.4%
無回答	5	5.3%
	251	-

その他FA

- ・ポストハーベスト（農薬とされていない物）
- ・会を通じて得られた情報は興味深く、有用であったが、食品安全委員会が意図する効果が得られるかは疑問。
- ・照射食品・食品安全委員会で検討した項目の個別の評価結果。例えば前回の大豆イソフラボンなど。
- ・食べる人間の強さを伝えては？ 細かい安全性ばかりでキリがないように感じます。
- ・リスクを起きないようにする企業のマネジメント
- ・ト殺場の管理対策・放射線殺菌

欄外コメント

- ・米国牛再輸入について。（回答：6）
- ・コメント内容：過小視されているが、サルモネラなどまだ改善の余地がある対策が多い。（回答：7）

問5. ご意見・ご感想

個人を特定できるものについては●●としています。

1	大変勉強になりました。ありがとうございました。
2	講師の用意された内容に対して講演時間が少なかった。
3	欧州での対応や考えなどがきけて、大変興味深かった。
4	関係者対象広すぎる為、結局表面的な事しか議論できないので有効な方法でないと思う。
5	フードチェーン全体をカバーするリスクコミュニケーションの深さを実感できました（ありがとう） <u>G.C.P</u> for Food Risk の検討を期待してます。
6	質問者の質問と回答者の回答が少しずれていたように思います。消費者がリスクコミュニケーションにどうやって関わっていくべきかが、あまり議論されなかったので残念に思いました。
7	今回で様々な話をもとにリスクコミュニケーションが前進して成長していくことを期待します。 これからもリスコミに参加協力していきたいと思っています。
8	ステークホルダーとして、国民全体にとってリスクコミュニケーションが進化・定着することはとても大切だと思う。ガッサンさんからのキーワードとして「善意、協力、相互に学び成長すること」が印象に残った。それぞれの立場（消費者・事業者・行政）で実践していきたいと強く感じた。たいへん良い学びができたことに感謝する。
9	・日本でも途中経過の開示、何故そうなったのか？などの説明が欲しい。 ・色々な情報へのアクセスをもう少し簡単にできるようにして欲しい。 Homeからは入っていけない場合もある。 ・もう少し「リスク」- case by caseになると思うが - を具体的に示して欲しい。
10	・プロセスの透明性が重要である ・相手によりニーズが異なる という事が認識できたと思います。
11	パネルディスカッションでパネリスト同士の意見交換、意見集約が少なかった。パネリストの発言時間をもう少し短くし、テーマをしばって、例えばこのやり方に対して賛成か反対か、から対話を開始するようなことがあったといいと思います。
12	EFSAの現状（問題点）、課題を具体的にあげて説明して欲しかった。
13	外国の方を呼ぶのはけっこうなのですが、前回もそうでしたが、しゃべるのが早いです。同時通訳もよいのですが、時間をとってゆっくりしてほしいです。
14	・食べ物が高品質にある前提をもう少し考えさせる議論があればよいのでは？ ・エネルギー自給率40%！！
15	EFSAは既に完成されたものであると考えていたので、意外だった。日頃、日本の食品安全委員会に対して、足りない部分ばかりめだつて仕方ないことと感じた。EFSAは大きいので、リスク評価への消費者関与までとはいっていないと感じた。
16	EUEFSAの制度や経緯についてはよくわかったが、題である「消費者関与」の部分について、ほとんど話されなかったのが残念でした。また、消費者関与の方法として、具体的にはどのような方法があるのか、EUのことに知りたかったです。
17	「100%安全な食品はない」ということについて、もっと議論し、コミュニケーションすべきではないかと思う。
18	「リスク評価への消費者関与」というテーマからは、不十分だったのでは？ テーマ設定をしようとした主催者の意図は評価しますが----
19	・食品中の化学物質が、単一のみならず複数での作用又は悪影響など。（ex. 安息香酸 + V.C → ベンゼン） ・今回のような海外の事例等の内容を希望します。 ありがとうございました。
20	パネリストの選定がよくない。 ●●氏は、消費者代表でなく、流通業者（日本生協連は流通業者だ）の代表だ。また ●●氏は、企業の代表だ。このような人の意見はききたくない。
21	消費者も専門家、企業も、「リスクコミュニケーション」はまだまだこれからだ..と改めて実感した。 今後、こういった講演やディスカッションがあるなら、具体的にどのように各立場の方々が動いているか、資料つきで説明を聞いてみたいと思う。
22	交換会で質問→回答でしたが、通訳を通すので適切な回答だったか？のものがありませんでした。 講演の後休けい時に質問をかくスペースをこのアンケートに入れて、質問したか否か、その回答は適切だったか？と書くところがあると、交換会での質疑に役立つのではないのでしょうか？
23	メモをとりやすくするため、机のある会場を希望する。 海外の事例を学ぶことは重要であり、今後も海外有識者の招へいを期待する。
24	相対的に評価するためには油脂や砂糖の影響（→肥満→動脈硬化）をあきらかにして、それに較べてDAGやアスパラテムがどうかと云う事を提示する必要がある。 旧来型の食品の健康影響の無びゅう性をリスク評価の根拠にしてよいのだろうか。 飼料・肥料と云う事では、リサイクル推進のために「有機なら良からう」と畑へたい肥やゴミが撒きちらかされ、しょうちゅうカスなどの飼料化もなされているが、本当にそれらが安全なのか？を化学肥料などと比較する必要もある。 W-3を富化するために豚や牛にエゴマや魚粉を与えて、さて、肉や乳は、酸化変性し易くないのだろうか？

25	複数の同時通訳者が御担当されていましたが、最も早口のやや声の高い方が最もわかりやすかったと思います。特に日本側の発言を英語に訳された時に、ゆっくり話す方は、略されている部分が目立ち、正確に、●●に伝わったのか、いささか心配でした。
26	●●の講演は、全体としてよく理解できたが、少々早すぎ、急ぎすぎの感あり、落ちついて聞くには。今一度よく深く聞いてみたいものである。全体像を簡単に現状だけでも...
27	このような企画も結構であるが、もっと重要なのは消費者である一般大衆に食の安全を指導啓蒙することが大切である。メディアを利用し広報することにもっと真剣に注力して欲しい。限られた人々へ何度やっても大きな効果はなく予算のムダづかいとなる！！
28	1. 食の安全は重要だが、食べる側の問題（リスクある食品に対する適正な対処：科学的判断、過度の反応に対する冷静な対処法など。etc）について、国民全体の意識の向上＝食育の問題が今後重要と思います。2. リスクコミュニケーションの意義については、おおむね討論されたと思うが、リスクコミュニケーションの具体的なテーマに対する結果の評価をもう少し具体例で話しをして欲しかった。
29	一般参加の立場です。専門用語が多くて閉口です。●●の話は、理解しましたが、会場からの質問者がむずかしいことばを使われるのでついていけないくらいでした。（通訳の人がうまく理解していない状況もありましたね。）リスコミに参加される専門家の方々であるはずなのに、一緒に会場で聞いている消費者（あまり専門知識）のことなど、全く考慮されていないご様子なのが、とても残念でなりませんでした。
30	法規制されていないもので危険性が考えられるもの、安全性が確認されていないものは不許可にすべき。現段階では法規制されていないものは許可されているが如く取扱われている。意見交換を重視されたい。
31	説明（通訳）が早口で、あまり理解できなかった。
32	本日のテーマ「・・・消費者関与」となっている。消費者が関与したリスコミ、取組みの内容がみえなかった。討論でも取り扱われたように見えない。
33	通訳はたいへんすばらしいと思います。しかし、声話し方がくらくてうとうしい。聞いていてゆううつになってきます。もう少し明るく話してほしい。
34	1. 食育の各県の取組は、食の意義、価値の正しい認識にあり、安全と安心については殆ど取り組まれていない。安全安心を重視すべき。2. 食育の大人版も考えるべき。3. 生産、流通者の自主簡易検査の普及、消費者の自主簡易検査をもっと進めた方がよい。4. トレーサビリティも一種のリスクコミュニケーションと思うがトレーサビリティの信頼性に欠ける点が多いと思う。この改善が行われると良い。もっと科学的、実証的であるべきである。
35	残留農薬や動物用医薬品についてポジティブリスト制により法律的には制度ができてきたと感じます。しかし、各ト場の管理や畜産業界生産者の理解はかなり遅れているように感じます。より、しっかりとした農水の対策や管理、地方への呼びかけ、情報の提供をせつにおねがいたします。
36	主題以外の挨拶、説明等は全体で5分間とされたい。
37	アスパルテムの評価結果についてのEFSAの報道の仕方には日本も学ぶべき点があると感じました。ただ、日本では情報の受手側にも未だに問題点が残っているので、すぐにEFSAのようなスタイルでの報道はむずかしいと思うが少しでも取り入れることができれば・・・と思います。
38	残留農薬の件で生産現場での使用基準や指導を徹底しないと農薬は減少しない。加工業者は農薬についてポジティブリストに従って良くなっているが、現実の生産現場でどうか？→生産農家にどれだけ農薬を勉強しているか？無知による農薬使用。一部の農家による農薬使用で、食品の安全が失われている。これが現実である。日本の農家をはやく対応しないとたいへんであると予想されます。
39	・非常に重要な内容が書かれているので、もう少し講演時間をとり、ていねいに説明してほしい。・リスコミを各ステークホルダー毎に行うことは参考になった。日本では消費者団体がほとんど発言し、他の異なる意見を認めず、合意形成しようとしており、不適切な開催方法と感じていた。特にBSE意見交換会の時は、総会屋の人間があり、科学的な評価に対して、業界としてコメントすると、つるし上げられそうで、発言をひかえる人が多かった。是非別々にリスコミを行って欲しい。また、意見が反映されていないという意見があるが、科学的評価は意見によって変わることがあってはいけないことも記します。それはリスク管理部内のやることである。